

## メディア文化論⑥若者はなぜポピュラー音楽が好きなのか？

### —（その6）戦後日本のポピュラー音楽 創作者たちは若者だったか？—

水 野 博 介\*

#### <目 次>

- 1 仮説と問題意識
- 2 検証方法
- 3 太平洋戦争敗戦直後の1940年代
- 4 1950年代から1960年頃まで
- 5 1960年代「和製ポップス」・GSブーム
- 6 60年代「青春歌謡」および「演歌」
- 7 60～70年代「フォーク」とアイドルたち
- 8 結語

#### 1 仮説と問題意識

前稿に引き続き、ここでは、一連の論考の最初に挙げた諸仮説（水野 2008 年）のうち、

⑥音楽を創造する側も若者が多く、その作品は若者の共感を得て、支持される

を取りあげる。前稿では、日本における検証を流行歌の初期の頃の創作者たちに限って試みたが、ここでは、太平洋戦争後の日本のポピュラー音楽シーンのなかでのヒット曲が、どのような人々によって創作されたかを見ていく。

ただし、原稿の締切日と予定枚数という制限から、この稿では、1970年代末くらいまでの時期を扱い、その後の「ニューミュージック」な

いしは「J ポップ」の発展期である1980年代以降、今日までの状況に関しては、別な稿で改めて論じることにする。

#### 2 検証方法

##### (1) データベース

ここでは、日本のポピュラー音楽についての呼称であった「歌謡曲」についての通史的な本を繙き、そこに出てくる「創作者」、つまり「作詞家」「作曲家」および「歌手（歌唱担当）」の活躍年代と主な作品の発表年代（より厳密には制作年代であるが、発表年代で代替する）を調べる。言い換えれば、各年代における「ヒット曲」を網羅するという点に焦点を合わせた本を一種の「データベース」として利用する、ということである。

なお、「歌謡曲」という言い方は、菊池清麿によれば、「昭和の初期、ラジオ放送で便宜上使われたことに始まる。だが、その言葉は、もともと大正期に歌の入った創作曲〔洋楽やクラシック音楽を含む〕という意味でも使われていた。大正期の流行歌は「はやり唄」といって、演歌師が歌うということから卑俗な要素を多分に含んでいるという認識があった」（菊池 2008 年、21 頁）ということである。

本稿では、たまたま本年（2011＝平成 23 年）2 月に出版されたばかりの、高護著『歌謡曲——時代を彩った歌たち』に記載されている楽曲名およびその創作者たちのリストを「データバ

\* みずの・ひろすけ  
埼玉大学教養学部教授、メディア論

ース」として利用する。

この本について、著者は、冒頭で「本書は歌謡曲という日本に生まれたひとつの音楽ジャンルを紹介し、作品を通じて探究する書籍である」

(高 2011 年, i 頁) と述べ、「時代とともに日々変貌を重ね続けているところが歌謡曲の最大の特徴ともいうべき性質であり本質である」(高同書, iii 頁) としている。本書に記載されている楽曲としては、「具体的には 1960 年から 1980 年代までの約 30 年間で 10 年単位で区切り、各年代をジャンル、傾向別に分類した。重要と思われる作品を紹介した」(高同書, iv 頁) という。

したがって、この本は、創作者たちが「若者」であるような楽曲を意図して選択し記載しているわけではないことは明らかであろう。本稿の仮説を検証するための一種の「データベース」として用いることに差支えはないように思われる。さらに、この本が便利なのは、巻末に「主要曲名リストおよび索引」と「主要人名リストおよび索引」が付いていて、本書の本文での記述で扱った多くの作品の発表年月と創作者たちの生年月日まで明らかになっている点である。

ただし、曲名は、なぜか 1959 (昭和 34) 年からのリストしかなく、それ以前の戦後の十数年分は本文の記述を参照するしかない。創作者についても、本文に記載されているがリストにはない人物が、かなり多かった。便利ではあるが、網羅的ではない。リストから漏れている創作者については、菊地清麿の著書(前掲書)の記述などで補う。また、具体的な楽曲についても、必ずしも歌唱を担当した歌手の代表作でないものが多く記されている印象があり、掲載の判断がかなり主観的にも思えるが、データベースとして使用するため、高の判断にそのまま従った。

なお、本稿では前稿と同様に、「創作者」としては「作詞家」「作曲家」および「歌手」を扱う。

この「創作」ということに関して、高護は

作品として完成する際に一般的には編曲と演奏(伴奏)が二次的要素として必要である。制作は分業であることが一般的で、主として歌手が体現しているが、作品に直接関わるのは作詞家、作曲家、編曲家、演奏家、録音技術者といった複数の人間で、制作面ではプロデューサー、ディレクター、プロダクションのマネージャーが作品成立の大きな要因となる。

と述べている(高前掲書, i ~ ii 頁)。確かに、実際に、ある楽曲が世に出るためには、先に挙げた 3 者だけでは不十分である。編曲や実際の演奏の良さが、その楽曲の人気を大きく左右することもある。しかしながら、多くの楽曲の場合には、編曲や演奏のあり方の記録がきちんと記載されていない。高の言う「二次的要素」まで扱うとなると煩雑だし、個々の楽曲で、そのような記述の有無の点で差異があるので、ここでは「一次的要素」(高はこの言葉をなぜか使っていない)である、先に挙げた 3 者に限って扱うことにする。

## (2)「創作者」についての情報

ここでは、基本的に、それらの「創作者」、つまり「作詞家」「作曲家」および「歌手(歌唱担当)」が何歳のときに、それらの作品が発表されたかという「年齢」を見ていくことにする。したがって、前稿と同様に、それらの「創作者」の「生年月日」は記すが、「没年月日」は記さないことにする。

また、これも前稿と同様だが、それらの作品がどのような時代背景にあって作られ、どのような内容のものであるかも、ある程度おさえた上で、発表当時の若者からどれほど共感と支持を得たかを関係者の証言等によって確認する。

以下では、太平洋戦争での敗戦後から 1970 年代末に至るまでの時期を適宜区切りながら、

それぞれの時期での、日本のポピュラー音楽シーンにおいてヒットした楽曲創作の状況を述べつつ、創作者たちの情報を確認していく（以下の記述は、データベースとした高護の 2011 年発行の著書を基にしているが、楽曲が掲載された頁をいちいち記すのは煩雑すぎるので、その頁数は省略している）。

### 3 太平洋戦争敗戦直後の1940年代

日本の敗戦から 2 か月足らずで封切られた映画『そよかぜ』（松竹、1945＝昭和 20 年公開）の主題歌「リンゴの唄」は、敗戦の重苦しさを吹き飛ばすかのような明るいメロディや歌詞で人気となり、レコード発売前から、まさに口コミで広まった。だから、演奏や歌唱を含む楽曲の音源そのものの力では必ずしもなかったと言える。この映画自体は戦争中から製作されており、歌だけが後で録音し直されたらしい。

この「リンゴの唄」の創作者たちの情報を記しておく。以下、基本的にはレコード（CD の登場は 1982＝昭和 57 年以降である）の発売開始時における創作者たちの年齢に着目することにする。

#### ①「リンゴの唄」

（レコードの発売は翌 1946＝昭和 21 年 1 月）

作詞：サトウ ハチロー

（1903＝明治 36 年 5 月 23 日生）当時 42 歳

【以下、「当時」は省略する】

作曲：万城目 正

（1905＝明治 38 年 1 月 31 日生） 41 歳

歌唱：並木路子

（1921＝大正 10 年 9 月 30 日生） 24 歳

および霧島 昇

（1914＝大正 3 年 6 月 27 日生） 31 歳

これら 4 名のうち、歌唱のメイン・ヴォーカルで映画の主役も演じた並木路子がただ一人

20 代であり、他は 30 代と 40 代であって、決して若くはない。霧島昇は戦前からの歌手で、レコードデビュー翌年の 1938（昭和 13）年には、24 歳にして映画『愛染かつら』（松竹）の主題歌「旅の夜風」を歌って大ヒットを飛ばしたが、この「リンゴの唄」では 2 番の歌詞を独唱し、3 番の歌詞では並木とデュエットしており、脇役的な存在である。

1948（昭和 23）年以降はレコード生産が軌道に乗り、ヒット曲が増産されていく。「リンゴの唄」以外の戦後 1940 年代に「大ヒット」した楽曲を以下に 3 曲（いずれも服部良一作曲）挙げ、その創作者たちの年齢を確認する。これらは、その当時の世相を色濃く反映したものとされる曲である（菊池前掲書、115・124 頁）。

#### ②「東京ブギウギ」

（レコード発売 1947＝昭和 22 年 12 月）

作詞：鈴木 勝（生年月日不明）

作曲：服部良一

（1907＝明治 40 年 10 月 1 日生） 40 歳

歌唱：笠置シズ子

（1914＝大正 3 年 8 月 25 日生） 33 歳

#### ③「青い山脈」

（レコード発売 1949＝昭和 24 年 4 月）

作詞：西條八十

（1892 [明治 25] 年 1 月 15 日生） 57 歳

作曲：服部良一

（1907＝明治 40 年 10 月 1 日生） 41 歳

歌唱：藤山一郎

（1911＝明治 44 年 4 月 8 日生） 38 歳

奈良光枝

（1923＝大正 12 年 6 月 13 日生） 25 歳

#### ④「銀座カンカン娘」

（レコード発売 1949＝昭和 24 年 7 月）

作詞：佐伯孝夫

(1902＝明治 35 年 11 月 22 日生) 46 歳

作曲：服部良一

(1907＝明治 40 年 10 月 1 日生) 41 歳

歌唱：高峰秀子

(1924＝大正 13 年 3 月 27 日生) 25 歳

以上の②～④の 3 曲は、作詞・作曲ともに戦前から活躍していたベテランの手になるものだった(鈴木勝は経歴不祥)。③と④の曲で 2 人の若手歌手が加わっているが、それらの歌手にしても当時 25 歳であり、“とても若い”というふうには言えない。「レコード会社の専属作家システムは充実期を迎え」(高前掲書, 6 頁), 安定した力をもつベテランの存在感が発揮されていたと言えよう。

#### 4 1950年代から1960年頃まで

連合国軍による占領もようやく終わり、「もはや戦後ではない」(1956＝昭和 31 年『経済白書』)と言われるようになって、高度経済成長(1955＝昭和 30 年～1973＝昭和 48 年)が始まり、日本は敗戦による壊滅状態から奇跡の復興を遂げるようになる。1950 年代の後半からは、「ロカビリー・ブーム」があり、若者のエネルギーのほとばしりが見られた。特に、若い女性の熱狂ぶりは、新憲法によって得られた「男女平等」の精神を体現するものだった。

この 1950 年代後半、つまり昭和で言えば 30 年代の前半は、菊池清麿によれば「歌謡界の分水嶺であり新旧の交代の時期だった。昭和 30 年に入ると、戦前から昭和 20 年代にかけて活躍した歌手のヒットが見られなくなった」(菊池前掲書, 152 頁)という。

この頃、「大正末から昭和初頭の生まれ」の「戦後ニュージェネレーション」(高前掲書, 7 頁)

に属する創作者たちが続々と現れる。石本美由起・星野哲郎・水木かおるといった人びとである。高護が「時代に対して十分に新しいセンスやトレンドを示したもの」(同)と評した楽曲を 3 曲取り上げてみよう。いずれも、当時、巷で話題になったヒット曲である。特に③は、日米安全保障条約の改定に反対する「安保闘争」が高まりを見せたが、結局は実を結ばなかった 1960＝昭和 35 年の作で、「この状況を象徴している歌が西田佐知子の《アカシヤの雨がやむとき》である。この歌は、安保闘争の挫折感を深く感じた若者の内面を癒した」(菊池前掲書, 178-9 頁)というふうに語られたりする。

##### ①「港町十三番地」

(レコード発売 1957＝昭和 32 年 3 月)

作詞：石本美由起

(1924＝大正 13 年 2 月 3 日生) 33 歳

作曲：上原げんと

(1914＝大正 3 年 12 月 28 日生) 42 歳

歌唱：美空ひばり

(1937＝昭和 12 年 5 月 29 日生) 19 歳

##### ②「黄色いさくらんぼ」

(レコード発売 1959＝昭和 34 年 10 月)

作詞：星野哲郎

(1925＝大正 14 年 9 月 30 日生) 34 歳

作曲：浜口庫之助

(1917＝大正 6 年 7 月 22 日生) 42 歳

歌唱：スリー・キャッツ (生年月日不明)

##### ③「アカシヤの雨がやむとき」

(レコード発売 1960＝昭和 35 年 4 月)

作詞：水木かおる

(1926＝大正 15 年 7 月 14 日) 33 歳

作曲：藤原秀行 (生年月日不明)

歌唱：西田佐知子

(1939=昭和 14 年 1 月 9 日生) 21 歳

以上の 3 曲についてみれば、作詞家と作曲家たちはいずれも 30~40 代であり、“若い”とは言えない。一方、①と③の歌手は、いずれも相当に若い。ベテランの作詞家・作曲家と若い歌手との組み合わせである。ただし、①の美空ひばりは、レコード・デビューが 12 歳であるから、19 歳とはいえ、キャリアはこの時点で結構長い。

## 5 1960年代「和製ポップス」・GSブーム

1960 年代は、まず 1950 年代後半からの「ロカビリー・ブーム」を受けて、洋楽を日本の歌手が歌う「カヴァー・ポップス」が主流となり、その後、多くの「和製ポップス」が作られるが、ビートルズの来日公演(1966=昭和 41 年 7 月)が日本のポピュラー音楽シーンに大きな影響を及ぼした。GS(グループ・サウンズ)ブームもその影響下に生まれたものである。

「和製ポップス」系の楽曲で、まずヒットとなったのは、日本レコード大賞受賞第一号の「黒い花びら」である。歌手は、ロカビリアンの一人の水原弘で、その歌唱の「解釈は 4 ビートでジャズやブルースの雰囲気の色濃く現れている」(高前掲書, 23 頁)とされる(ムード歌謡的と言ってもよいであろう)。この楽曲の作詞は永六輔、作曲は中村八大であるが、この「六・八コンビ」は、その後、次々にヒット曲を飛ばしていく。最大のヒットは「上を向いて歩こう」である。次いで、「こんにちには赤ちゃん」で再度、日本レコード大賞を受ける。以上の 3 曲について、創作者情報をまとめておく。

### ①「黒い花びら」

(レコード発売 1959=昭和 34 年 9 月)

作詞：永 六輔

(1933=昭和 8 年 4 月 10 日生) 26 歳

作曲：中村八大

(1931=昭和 6 年 1 月 20 日生) 28 歳

歌唱：水原 弘

(1935=昭和 10 年 10 月 1 日生) 23 歳

### ②「上を向いて歩こう」

(レコード発売 1961=昭和 36 年 10 月)

作詞：永 六輔

(1933=昭和 8 年 4 月 10 日生) 28 歳

作曲：中村八大

(1931=昭和 6 年 1 月 20 日生) 30 歳

歌唱：坂本 九

(1941=昭和 16 年 12 月 10 日生) 19 歳

### ③「こんにちには赤ちゃん」

(レコード発売 1963=昭和 38 年 11 月)

作詞：永 六輔

(1933=昭和 8 年 4 月 10 日生) 30 歳

作曲：中村八大

(1931=昭和 6 年 1 月 20 日生) 32 歳

歌唱：梓みちよ

(1943=昭和 18 年 6 月 4 日生) 20 歳

①の楽曲の時点では、創作者たちは 3 人とも 20 代の若者であったが、②と③の楽曲になると、作詞家・作曲家と歌手との間に、およそ 10 歳の開きがあり、ベテランの領域に達しつつあった作詞家・作曲家のコンビと、とても若い歌手との組み合わせになっている。

なお、以上の 3 曲のうち、②は全米のヒットチャート(ビルボード誌)に 3 週連続で第 1 位にランクされ、世界的にもヒットした。菊池清麿はこの楽曲を「1960 年代の新しい歌謡曲分野を象徴する歌」とし、「この歌によって、若者の好み如歌謡曲に影響するようになったと

いえる」(菊池前掲書, 180 頁)と評している。

以上の場合、歌手は若い、それ以外の創作者は必ずしも“若い”とは言えず、作られた楽曲自体はさわやかなものが多かったが、若者でなければできないような類の、例えば、初々しい恋愛を歌ったようなものではなかった。

しかし、アメリカンポップスや英米のフォークやロックなどの影響が、徐々に日本の音楽シーンに及んで行く。例えば、石原裕次郎や倍賞千恵子らと並んで「歌う映画スター」の一人であった加山雄三は、弾厚作というペンネームで作曲を手掛け、そのメロディに岩谷時子が作詞をする、という形で次々にヒットを連発していった。加山雄三は、「若大将」というニックネームにふさわしく、若者らしい、さまざまな楽曲をつくった。以下に、代表作の「君といつまでも」について見ておく。

#### ④「君といつまでも」

(レコード発売 1965＝昭和 40 年 12 月)

作詞：岩谷時子

(1916＝大正 5 年 3 月 28 日生) 49 歳

作曲：弾厚作 (=加山雄三)

歌唱：加山雄三

(1937＝昭和 12 年 4 月 11 日生) 28 歳

年齢からすると、意外にも、“若い”コンビではない。恋愛に関しても、ある程度の精神的“成熟”がないと、いい楽曲をつくることはできないのかもしれない。しかし、このあたりから、歌手が自ら作曲あるいは作詞を手掛けることが増えてくる。

次に、ビートルズの来日をきっかけに多数のバンドが形成され、一大ブームとなった GS などの楽曲について見ておく。バンドについては、メイン・ヴォーカルの歌手の年齢を見ることにする(歌手名の後にバンド名をカッコに入れて示す)。

#### ⑤「思い出の渚」

(レコード発売 1966＝昭和 41 年 11 月)

作詞：鳥塚繁樹

(1947＝昭和 22 年 3 月 23 日生) 19 歳

作曲：加瀬邦彦

(1941＝昭和 16 年 3 月 6 日生) 25 歳

歌唱：鳥塚繁樹 (ザ・ワイルド・ワンズ)

#### ⑥「ブルーシャトウ」

(レコード発売 1967＝昭和 42 年 3 月)

作詞：橋本 淳

(1939＝昭和 14 年 7 月 8 日生) 27 歳

作曲：井上忠夫

(1941＝昭和 16 年 9 月 13 日生) 25 歳

歌唱：井上忠夫

(ジャッキー吉川とブルーコメッツ)

#### ⑦「君だけに愛を」

(レコード発売 1968＝昭和 43 年 1 月)

作詞：橋本 淳

(1939＝昭和 14 年 7 月 8 日生) 28 歳

作曲：すぎやまこういち

(1931＝昭和 6 年 4 月 11 日生) 36 歳

歌唱：沢田研二 (ザ・タイガース)

(1948＝昭和 23 年 6 月 25 日生) 19 歳

#### ⑧「恋のハレルヤ」

(レコード発売 1967＝昭和 42 年 2 月)

作詞：なかにし礼

(1938＝昭和 13 年 9 月 2 日生) 28 歳

作曲：鈴木邦彦

(1938＝昭和 13 年 3 月 1 日生) 28 歳

歌唱：黛ジュン

(1948＝昭和 23 年 5 月 26 日生) 18 歳

歌手が自ら作曲あるいは作詞を手がけた場合  
(④加山 ⑤鳥塚 ⑥井上)は, 19～28 歳であり,

“若い”と言えよう。⑧の黛ジュンについて、高護は「ビート革命の旗手」として評価している（高前掲書、19 頁）。ただ、この時期の代表曲として挙げた以上の 8 曲は、確かにいずれも洋楽の影響下にある楽曲であるが、歌の質としては“歌謡曲”的なものが多かったのは事実である。

## 6 60年代「青春歌謡」および「演歌」

同じ 1960 年代には、「青春歌謡」と呼ばれた一群の歌謡曲が作られた。この「青春歌謡」は広義には十代の若者を対象とした歌謡曲全般だが、一般には、60 年代前半から半ばにかけての「学園ソング」とその周辺の類似作品を示す（高同書、44 頁）とされる。これらの作品群とともに「アイドル」が誕生する。

「アイドル」の先駆けとなった「御三家」（三田明を加えて「四天王」とも呼んだ）のデビュー曲を見ておく。

### ①「高校三年生」

（レコード発売 1963＝昭和 38 年 6 月）

作詞：丘灯至夫（おか としお）

（1917＝大正 6 年 2 月 8 日生） 46 歳

作曲：遠藤 実

（1932＝昭和 7 年 7 月 6 日生） 30 歳

歌唱：舟木一夫

（1944＝昭和 19 年 12 月 12 日生） 18 歳

### ②「潮来笠」

（レコード発売 1960＝昭和 35 年 8 月）

作詞：佐伯孝夫

（1902＝明治 35 年 11 月 22 日生） 57 歳

作曲：吉田 正

（1921＝大正 10 年 1 月 20 日生） 39 歳

歌唱：橋 幸夫

（1943＝昭和 18 年 5 月 3 日生） 17 歳

### ③「君だけを」

（レコード発売 1964＝昭和 39 年 3 月）

作詞：水島 哲

（1938＝昭和 13 年 9 月 2 日生） 25 歳

作曲：北原 純

（1938＝昭和 13 年 3 月 1 日生） 26 歳

歌唱：西郷輝彦

（1947＝昭和 22 年 2 月 5 日生） 17 歳

### ④「美しい十代」

（レコード発売 1963＝昭和 38 年 10 月）

作詞：宮川哲夫

（1922＝大正 11 年 2 月 7 日生） 41 歳

作曲：遠藤 実

（1932＝昭和 7 年 7 月 6 日生） 31 歳

歌唱：三田 明

（1947＝昭和 22 年 6 月 14 日生） 16 歳

以上の楽曲を歌った 4 人の「アイドル」たちはすべて 10 代で、楽曲自体もヒットしたが、作詞家・作曲家の方は 25 歳が最年少であり、全体的には“若い”とは言いがたい。特に作詞家はベテランの傾向があった。

ついでに演歌を見ておく。「演歌」は、明治から昭和初期にかけては、政治や社会批判を含んだ歌を指し、第一人者の添田啞蟬坊などは、レコード録音を拒否したとされる。したがって、それと違って、1960 年代の「演歌」はむしろ、たいへん“新しい”ジャンルであった。菊池清麿によれば、「流行歌・歌謡曲といわれた歌が、演歌という形容で呼ばれるようになったのは 1960 年代後半からである。またそれは、日本の歌謡曲がビートルズサウンドの影響から演歌とポップスに分けられ始めたスタート点でもある」（菊池前掲書、188-9 頁）という。

以下では、1960年代にデビューした若い演歌歌手（現在ではいずれも大ベテランである）のヒット曲3曲について見てみる。

⑤「アンコ椿は恋の花」

（レコード発売 1964＝昭和 39 年 10 月）

作詞：星野哲郎

（1925＝大正 14 年 9 月 30 日生） 39 歳

作曲：市川昭介

（1933＝昭和 8 年 1 月 4 日生） 31 歳

歌唱：都はるみ

（1948＝昭和 23 年 2 月 22 日生） 16 歳

⑥「涙を抱いた渡り鳥」

（レコード発売 1964＝昭和 39 年 11 月）

作詞：星野哲郎

（1925＝大正 14 年 9 月 30 日生） 39 歳

作曲：市川昭介

（1933＝昭和 8 年 1 月 4 日生） 31 歳

歌唱：水前寺清子

（1945＝昭和 20 年 10 月 9 日生） 19 歳

⑦「なみだ船」

（レコード発売 1962＝昭和 37 年 6 月）

作詞：星野哲郎

（1925＝大正 14 年 9 月 30 日生） 36 歳

作曲：船村 徹

（1932＝昭和 7 年 6 月 12 日生） 30 歳

歌唱：北島三郎

（1936＝昭和 11 年 10 月 4 日生） 25 歳

作詞はたまたますべて星野哲郎が担当している。星野はすでにベテランの域に達しつつあった。演歌の歌手は一般にヒット曲が出るのが遅いが、以上の3人は早くヒットが出た方である。

## 7 60～70年代「フォーク」とアイドルたち

1960年代から、アメリカの影響を受けて、日本でも「フォーク」が歌われるようになる。1960年代後半は、反戦的な風潮や東西冷戦の影響を反映したアメリカのフォークの影響が、特にプロテスト色の強い「関西フォーク」を生んだ。彼らは、自ら創作を手掛けるようになる。この日本における初期のフォークの代表作を3曲挙げて、創作者たちについて見てみる。森山良子はその歌声の美しさから「日本のジョーン・バエズ」と呼ばれた（バエズは反戦的な歌を多く歌ったが、森山にそれほどの思想的背景はなかったと思われる）。高石ともやや岡林信康は「関西フォーク」の代表的な歌手であり、岡林は「日本のボブ・ディラン」あるいは「フォークの神様」とも呼ばれ、日本フォーク界の第一人者であった。

①「この広い野原いっぱい」

（レコード発売 1967＝昭和 42 年 1 月）

作詞：森山良子

（1948＝昭和 23 年 1 月 18 日生） 19 歳

作曲：小藺江圭子（生年月日不明）

歌唱：森山良子

②「受験生ブルース」

（レコード発売 1968＝昭和 43 年 3 月）

作詞：中川五郎

（1949＝昭和 24 年 7 月 25 日生） 18 歳

作曲：高石ともや

（1941＝昭和 16 年 12 月 9 日生） 26 歳

歌唱：高石ともや

③「山谷ブルース」

（レコード発売 1968＝昭和 43 年 12 月）

作詞・作曲・歌唱：岡林信康

（1946＝昭和 21 年 7 月 22 日生） 22 歳



「フォーク」のように自作自演のスタイルが生まれてくると、創作者たちはかなり若くなってくる。ただし、以上はまだ 1960 年代の状況であり、ステージを含め、日本のポピュラー音楽シーンを席卷するに至る 1970 年代のフォークをみておかないといけない。70 年代のフォークは、60 年代末と異なり、私生活中心主義的な歌詞世界が展開されると同時に、大衆化され商業化された音楽へと変貌していく。

この時期、「フォーク」は、高護も述べているように「総称」であり、実際には「ロック」的なものも混じっている（高前掲書、106 頁）。ただし、先述の岡林信康が、ボブ・ディランに倣って「フォーク・ロック」という風に自らを規定しようとして聴衆に受け入れられなかったように、「フォーク・ロック」という言い方もそれほど広まらなかったようである。

ここでは、以下の 4 組を取り上げる。彼らは、「音楽的にはどれもかなり異なる」（高同書、107 頁）のは確かである。

#### ④「結婚しようよ」

（レコード発売 1972＝昭和 47 年 1 月）

作詞・作曲・歌唱：吉田拓郎

（1946＝昭和 21 年 4 月 5 日生） 25 歳

#### ⑤「心もよう」

（レコード発売 1973＝昭和 48 年 9 月）

作詞・作曲・歌唱：井上陽水

（1948＝昭和 23 年 8 月 30 日生） 25 歳

#### ⑥「魔法の黄色い靴」

（レコード発売 1972＝昭和 47 年 6 月）

作詞・作曲：財津和夫

（1948＝昭和 23 年 2 月 19 日生） 24 歳

歌唱：財津和夫（チューリップ）

#### ⑦「ルイジアンナ」

（レコード発売 1972＝昭和 47 年 [発売月不明]）

作詞：大倉洋一

（1952＝昭和 27 年 9 月 3 日生） 19～20 歳

作曲：矢沢永吉

（1949＝昭和 24 年 9 月 14 日生） 22～23 歳

歌唱：矢沢永吉（CAROL）

以上のうち、吉田拓郎や井上陽水は、デビューはもっと早く、すでにさまざまなレコードを出していたが、商業的にヒットしたのは、上記の楽曲の頃からである（ただし、井上には前年に出してヒットした「傘がない」【レコード発売 1972＝昭和 47 年 8 月】がある）。

以上の 4 組に加えて、時代を象徴する楽曲とされる「神田川」について見ておく。

#### ⑧「神田川」

（レコード発売 1973＝昭和 48 年 9 月）

作詞：喜多条忠（まこと）

（1947＝昭和 22 年 10 月 24 日生） 25 歳

作曲：南こうせつ

（1949＝昭和 24 年 2 月 13 日生） 24 歳

歌唱：南こうせつ（かぐや姫）

以上の④～⑧に関しては、だいたい 20 代前半くらいからの活躍と言える。歌手が作詞や作曲を手掛けるようになり、「若者」が実際に自分の心情を託して創作した楽曲を自ら歌うようになったのとも言えよう。

では、同じ頃に、主としてテレビでその存在感をアピールしていた「アイドル」歌手たちについて、その楽曲の創作者たちはどうであったろうか？ 以下では、1970 年代にお茶の間の人気を集めた 6 組の「アイドル」たちについて見てみる。

⑨「わたしの城下町」

(レコード発売 1971=昭和 46 年 4 月)

作詞：安井かずみ

(1939=昭和 14 年 1 月 12 日生) 32 歳

作曲：平尾昌晃

(1937=昭和 12 年 12 月 24 日生) 33 歳

歌唱：小柳ルミ子

(1952=昭和 27 年 7 月 2 日生) 18 歳

⑩「17 才」

(レコード発売 1971=昭和 46 年 5 月)

作詞：有馬三恵子

(生年月日不祥) 当時 20 代後半くらいか?

作曲：筒美京平

(1940=昭和 15 年 5 月 28 日生) 31 歳

歌唱：南 沙織

(1954=昭和 29 年 7 月 2 日生) 16 歳

⑪「虹をわたって」

(レコード発売 1972=昭和 47 年 9 月)

作詞：山上路夫

(1936=昭和 11 年 8 月 2 日生) 36 歳

作曲：森田公一

(1940=昭和 15 年 2 月 25 日生) 32 歳

歌唱：天地真理

(1951=昭和 26 年 11 月 5 日生) 20 歳

⑫「春一番」

(レコード発売 1976=昭和 51 年 2 月)

作詞・作曲：穂口雄右

(1948=昭和 23 年 1 月 24 日生) 28 歳

歌唱：キャンディーズ

伊藤蘭 (愛称：ラン)

(1955=昭和 30 年 1 月 13 日生) 21 歳

藤村美樹 (ミキ)

(1956=昭和 31 年 1 月 15 日生) 20 歳

田中好子 (スー)

(1956=昭和 31 年 4 月 8 日生) 19 歳

⑬「横須賀ストーリー」

(レコード発売 1976=昭和 51 年 6 月)

作詞：阿木燿子

(1945=昭和 20 年 5 月 1 日生) 31 歳

作曲：宇崎竜童

(1946=昭和 21 年 2 月 23 日生) 30 歳

歌唱：山口百恵

(1959=昭和 34 年 1 月 17 日生) 17 歳

⑭「ペッパー警部」

(レコード発売 1976=昭和 51 年 8 月)

作詞：阿久 悠

(1937=昭和 12 年 2 月 7 日生) 39 歳

作曲：都倉俊一

(1948=昭和 23 年 6 月 21 日生) 28 歳

歌唱：ピンクレディー

増田恵子 (愛称：ケイ)

(1957=昭和 32 年 9 月 2 日生) 18 歳

根本美鶴代 (ミー)

(1958=昭和 33 年 3 月 9 日生) 18 歳

アイドル歌手が歌う楽曲は、第一義的に“商業的”な、レコードを売するための曲であるが、⑨～⑭を通じて、中堅的な作詞家・作曲家と 10 代～20 歳そこそこの歌手の組合せになっている。

## 8 結語

太平洋戦争敗戦後から 1970 年代後半までの、日本における「歌謡曲」のヒット・チャートを賑わせた楽曲合計 35 曲について、その創作者たちを見てみた。歌手については、概ね 25 歳くらいまでの「若者」であったが、作詞者や作曲者に関しては、歌手が自作自演を行う「フォーク」

と「GS」の一部などを例外として、ほとんどの場合、30代～50代の中堅・ベテラン創作者であった。聴き手は、若い歌手に自らを重ね合わせることが多かったのであろうが、実はその背後にいる「黒子」としての作詞者・作曲者は、多くは熟達の創り手であり、主な聴き手である若者はその術中にはまっていた、と言えよう。

#### <文 献>

水野博介「メディア文化論①若者はなぜポピュラー音楽が好きなのか?—(その1) 諸仮説の提示と若干の検証—」『埼玉大学紀要教養学部』第44巻第2号, 115-122頁, 2008年

菊池清麿『日本流行歌変遷史 歌謡曲の誕生からJ・ポップの時代へ』論創社, 2008年

高 護『歌謡曲——時代を彩った歌たち』岩波新書, 岩波書店, 2011年

(注) なお、創作者たちの生年月日が文献に載っていない場合があり、それを補うため、適宜、Wikipediaを利用した。経験的に言って、Wikipediaが、人物の生年月日に関して他の文献と比べて特にミスが多いというようなことはないと思われる。